132301

日文 701561143

澤宮久孝

萬葉集注釋

大連外國語学院图书館
藏

第十三

ナポエ論社

萬葉集注釋第十三卷　奥附

昭和三十九年三月二十五日初版　昭和四十九年九月二十日十二版

著者澤瀉久孝（おもだかひさたか）　發行者高梨茂　印刷者山田博　印刷所株式會社三陽社東京都板橋區板橋四丁目四七番七号　發行所中央公論社東京都中央區京橋二丁目一番地　振替東京三四番

定價三千圓

本文抄造　三菱製紙株式會社
表紙麻布　望月株式會社
製本所　小泉製本株式會社
製函所　加藤製函印刷株式會社

我会妹毛有跡謂者祐國尓毛家尓毛也
可未詳故可將行
拾古事記曰件奇者木梨之輕太子自
死之時所作者也

反歌

年渡麻五尓毛人者有云乎何時之間毛
母吾忘尓来
年わたるまでにもひとはあるとい

『金砂子切萬葉集』 著者所藏

凡例

一、原本の傳はらない古典の注釋の底本としては、その原本の時代に近い古寫本か、世に最も廣く行はれてゐる流布本か、いづれかが用ゐられがちであるが、兩者に一長一短のある事、他の古典の場合にも既に述べられてゐるところである。私はその兩者の長を採らうとして底本の二本立といふ事を思ひついた。定本萬葉集以來、西本願寺本を底本とする事が二三の注釋書にも行はれてゐるが、それは廿卷完備した最も古い寫本としてうなづかれる態度ながら、西本願寺本と流布本とは大體系統を同じくするものであるから、私は系統を異にする古寫本と流布本（寛永本）とを照合して、兩者の間に異同がある場合はその正しいと認めた方を採つた。從つてそのいづれか一本が誤と明瞭に認められるものは一々注を加へない。その底本とした二本以外の諸本、諸注によつて訂正したもののみ注を加へた。たとへば 諍（紀）淨 とあるは二つの底本には「淨」とあるが、紀州本に「諍」とあるによつた事を示し、根（考）枕 とあるは底本をはじめ諸本に「枕」とあるを考によつて「根」と改めたものであり、杂（峯） とあるは諸本に「峯」とあるが「杂」の誤字と認むべきでないかと思はれるものであり、（丹）（紀） とあるは紀に無いにより衍字と思はれるものである。

一、流布本と系統を異にする古寫本は殆ど廿卷完備したものなく、中には斷簡に過ぎないものもあるから、歌一首一首に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ついてどの古寫本を底本としたかを注記した。それによつてその歌の古寫本がどのあたりまで溯り得るかを明らかにし、訓詁の參考にすると共に、古寫本の新なる發見に備へる事も出來ようと考へたからである。たとへば原文の下に（類、六・六）とある歌は、桂、金、天、元等の古寫本は傳はつてゐない事を示すものである。それら古寫本の時代については正確には定め難いが、本書に底本とするに當つては次の如き順によつた。

桂、金、藍、天、元、金砂子切、類、古、紀、尼、嘉。

一、古寫本の校合は複製本のあるものはすべてそれによつた。複製本に漏れたものは原本によつた。その場合はその所在を明らかにした。陽明本と京大本とは著者みづから原本について校合を加へた透寫本（著者所藏）を用ゐた。冷泉本、金澤文庫本、細井本、大矢本は校本萬葉集の注記に從つた。

一、原文の文字は大體舊字體（當用漢字體に非ずといふ意味）を用ゐたが、誤字考察のたよりを考へて、原文又は原本に近き書體と認められるものはそれによつた。「尓」（三三）、「礼」（三三）、「刺」（三三）、「与」（三三）の如きである。

一、原文の下の注記（類、八・四二）は類聚古集第八卷四十二頁の意であり、（古、一・一五オ）とあるは古葉略類聚鈔第一冊十五丁表の意である。古葉略類聚鈔の現存の卷は八、九、十、十二と、卷名不明の卷との五冊であるが、本書では複製本にかりに一、二、三、四、五と名づけられてゐるのに從つた。

一、「西（右に青）、京（青）、細などヌカシ」とあるは、シの文字が青で書かれてゐる意である。

一、本文に引用の萬葉集の歌には番號を記した。（三・三六）とあるは卷三にある三六一番の歌である。卷數をあげないものはその注釋の卷の中の歌である。

一、萬葉集以外の歌集その他諸書の下の數字はすべて卷數を示す。日本書紀は卷數によらず單に神代紀上、神武紀などと

記した。古事記も中卷、下卷など書かず、神武記、仁德記などと記した。伊勢物語は池田龜鑑氏の校本にも採用せられてゐる天福本の段數をあげた。新撰字鏡は天治本によつた。享和本、群書類從本によるものは（享）（群）と注した。「倭名抄」と書いたものは倭名類聚抄十卷本であり、「和名抄」と書いたものは同、廿卷本である事を示した。高山寺本は（高）と注した。類聚名義抄は（佛、上）（法、中）など注したものは觀智院本である。色葉字類抄（上）（中）など記したものは三卷本（古典保存會刊）であり、伊呂波字類抄（一）（二）など記したものは十卷本（日本古典全集所收）である。

一、書名を省略して引用したものを左に掲げる。

桂	桂本萬葉集	壬	傳壬生隆祐筆本萬葉集
金	金澤本萬葉集	嘉	嘉曆（傳承）本萬葉集
藍	藍紙本萬葉集	紀	紀州本（校本に神田本とあるもの）萬葉集
天	天治本萬葉集	西	西本願寺本萬葉集
元	元曆（校）本萬葉集	細	細井本萬葉集
類	類聚古集	陽	陽明文庫本萬葉集（京都大學所藏。校本に溫故堂本とある親本）
古	古葉略類聚鈔	矢	大矢本萬葉集
尼	尼崎本萬葉集	京	京大本萬葉集（校本に京都帝國大學本とあるもの。曼珠院舊藏）
冷	冷泉本萬葉集	無	無點本萬葉集
文	金澤文庫本萬葉集		

附　附訓本萬葉集

寛　寛永本萬葉集

仙　萬葉集注釋（仙覺抄ともいふ）　仙覺

拾　萬葉拾穗抄　北村季吟

管見　萬葉集管見　下河邊長流

代　萬葉代匠記　契沖

（引用にあたり平かなを用ゐたものは初稿本、片カナを用ゐたものは精撰本）

童　萬葉集童蒙抄　荷田信名

考　萬葉考　賀茂眞淵

槻　萬葉集槻乃落葉　荒木田久老

玉　萬葉集玉の小琴　本居宣長

略　萬葉集略解　加藤千蔭

檜　萬葉集檜嬬手　橘守部

攷　萬葉集攷證　岸本由豆流

古義　萬葉集古義　鹿持雅澄

註疏　萬葉集註疏　近藤芳樹

動植正名　萬葉古今動植正名　山本章夫

美　萬葉集美夫君志　木村正辭

文字辨證　萬葉集文字辨證　木村正辭

字音辨證　萬葉集字音辨證　木村正辭

訓義辨證　萬葉集訓義辨證　木村正辭

新考　萬葉集新考

（安藤野雁と井上通泰と兩氏に同名の著書があるので、井上氏新考と記したところがあるが、安藤氏のものは引用するところが少く、單に新考とあるは井上氏のものである。それも歌文珍書保存會刊行のものと國民圖書株式會社刊行のものとあり、主として前者によつたが、「增訂」と記したところは後者によつたものである。）

增、選　增訂本萬葉集選釋　佐佐木信綱

口譯　口譯萬葉集　折口信夫

總索引　萬葉集總索引　正宗敦夫

新講　萬葉集新講　次田潤

新訓　新訓萬葉集　佐佐木信綱

講義　萬葉集講義　山田孝雄

新解　萬葉集新解　武田　祐吉
新釋　萬葉集新釋　澤瀉　久孝
（伊藤左千夫氏にも同名の著がある。その場合は著者の名をあげた。）
私解　萬葉集私解　花田比露思
全釋　萬葉集全釋　鴻巣　盛廣
難語難訓攷　萬葉難語難訓攷　生田　耕一
秀歌　萬葉秀歌　齋藤　茂吉
評釋篇　柿本人麿評釋篇　齋藤　茂吉
雜纂篇　柿本人麿雜纂篇　齋藤　茂吉
新見　萬葉集新見　森本　治吉
講話　萬葉集講話　澤瀉　久孝
小徑　萬葉集小徑　土屋　文明
古徑　萬葉古徑　澤瀉　久孝
作品と時代　萬葉の作品と時代　澤瀉　久孝
新校　萬葉集新校　澤瀉　久孝
定本　定本萬葉集　佐伯梅友　佐佐木信綱　武田祐吉

論究　萬葉集論究　第一輯　松岡　靜雄
染草考　日本上代染草考　上村　六郎
植物新考　萬葉植物新考　松田　修
動物考　萬葉動物考　東　光治
續動物考　續萬葉動物考　東　光治
兵庫篇　萬葉地理研究　兵庫篇　坂口　保　増田　德二
大和志考　萬葉大和志考　奥野　健治
山代志考　萬葉山代志考　奥野　健治
全譯　全譯萬葉集　武田　祐吉
全註釋　萬葉集全註釋　武田　祐吉
（改造社版と角川版とがある。本書は主として前者によつたが、增訂されたところは後者によつた。現代かなづかひになつてゐるものは後者よりのものである。）
評釋　萬葉集評釋
（橋田東聲氏、金子元臣氏、窪田空穗氏の同名の書がある。本書には著者の名を附して引用した。）

夕尓波　霞多奈毗久　　夕には　霞たなびく
汗陳羽振　樹奴礼我之多尓　　打ち羽振き　木ぬれが下に
鶯鳴母　　鶯鳴くも

（二元）

【口譯】冬枯の木も繁る春になつて來ると、朝には白露が置き、夕方には霞がたなびく。羽ばたきをしながら、木末の下では鶯が鳴くよ。

【訓釋】**冬こもり**――春の枕詞（一・二六）。「成」は「盛也」とあつて、モリと訓んで、冬枯の木が繁くなること。「成」の字が類にのみ「盛」とあるは「成」ではモリと訓みにくい爲に「盛」と改めたこと前に述べた。

春さり來れば――「さる」はなるの意。當時既に古語となつてをり、「さる」の終止形は萬葉に見えず、「されば」の形が多く用ゐられ、「さらば」「さりて」の例は僅かしかなく、古今以後は用ゐられなくなつたこと前（一・二六）に述べた。

夕には霞たなびく――アサにはヨヒといひ、アシタにはユフベといふ。夕霞を詠んだ作は前に人麻呂集の作（十・二八三）があつた。そこで述べたやうに萬葉には「朝霞」の語はあつて「夕霞」の語はまだない。しかし夕の霞を詠んだ作はあるわけである。

打ち羽振き――原文、天、元、紀、西、陽、矢、京「汗瑞能振」とあり、類（十七・七）には「汗埼　振」とあり左に「此句可考」とある。細と版本とには「汗湍能振」とあり、古來難訓の句とされてゐた。この歌、天、元、類には別行の訓なく、西、細、陽、矢、京には朱書されてをり、仙覺の新點と思はれるが、それらをはじめ版本に至るまでアメノフル（細にのみアセ）とあるが右のどの文字からもさうは訓めない。そこで代匠記には「カゼノフクト讀ベシ。汗ハ音ヲ用、湍ハ

萬葉集注釋卷第十三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

萬葉集卷第十三

雜歌廿七首（三三三一―三三四七）……五
相聞歌五十七首（三三四八―三三〇四）……七二
問答歌十八首（三三〇五―三三三三）……一七一
譬喩歌一首（三三三四）……一九九
挽歌廿四首（三三三五―三三四七）……二〇二

口繪

金砂子切

寫眞目次

天治本萬葉集（三三一）……七
類聚古集（三三二）……七
山邊五十師の原……四〇
元暦校本萬葉集（三三七）……四五
くくりの宮……五八
元暦校本萬葉集（三三五）……八七
天治本萬葉集（三三七）……一一五
元暦校本萬葉集（三三七）……一一五
天治本萬葉集（三三〇）……二二九
神島……二四九

圖版目次

山邊五十師の原附近……三九
くくりの宮附近……五七
神島附近……二四五

雜歌

この巻は雜歌、相聞、問答、譬喩歌、挽歌と分類されてをり、長歌が主となり、短歌、旋頭歌は反歌としてのもののみである。反歌のない長歌もあり、眞淵の萬葉考ではこの巻を巻一、二に次ぐものとして巻三としてゐる。しかしこの巻には古いものがあると共に、和銅元年の作や養老六年の作もあり、古い長歌に新しい短歌を添へて反歌としたものもあり、編纂はやはり巻十一、十二などと同じ頃のものと見るべきである。

用字法は巻十一、十二とほゞ同じであるが、義訓、戯書が多い。

三三一　冬木成（フユコモリ）　春去來者（ハルサリクレバ）　冬こもり　春さり來れば

朝尓波（アシタニハ）　白露置（シラツユオキ）　朝（あした）には　白露置き

評釋　評釋萬葉集　佐佐木信綱
（これも著者の名を附した。）
大成　萬葉集大成　平凡社版
私注　萬葉集私注　土屋文明

歌人の誕生　萬葉歌人の誕生　澤瀉久孝
古典大系本　古典文學大系本萬葉集　高木市之助　五味智英　大野晋

一、本書へ引用の雜誌名で、同名が他にもありなどして疑問をもたれるかと思はれるものの發行所を左にあげておく。

國文學　關西大學國文學會
女子大國文　京都女子大學國文學會
山邊道　天理大學國文學研究室

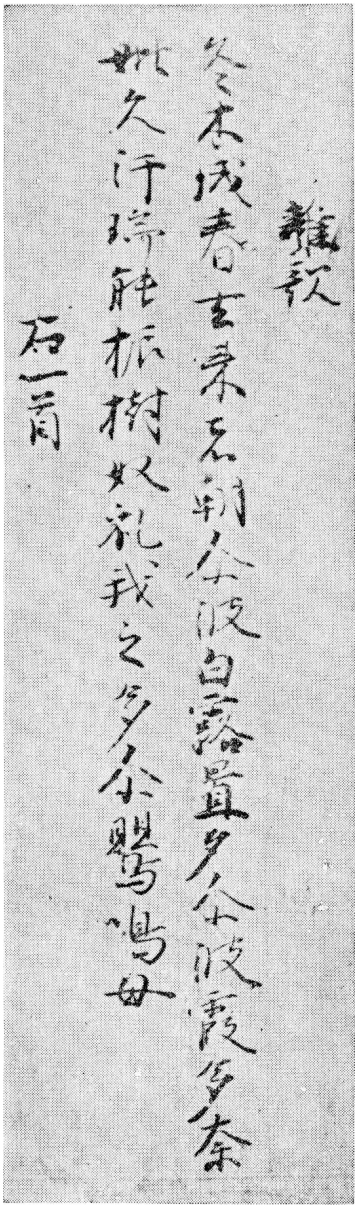
一、引用の諸書の文章は文字もみだりに變更しなかつた。但、假名に一切濁點を用ゐないものは、馴れない讀者の不便を考へて濁點を加へた。仙覺抄、代匠記などの注の如きである。

一、現代諸家の論攷の題目には「　」を加へ、單行本には『　』を加へて區別した。

一、上代特殊假名遣については本書中それぞれの場合に當つて述べたが、初學の方の爲に、萬葉ではア行のエ（衣）とヤ行のエ（延）との區別の他に次の十二音の區別があつた事を列擧しておく。

（甲類）　伎（キ）、祁（ケ）、古（コ）、蘇（ソ）、刀（ト）、努（ノ）、比（ヒ）、敝（ヘ）、美（ミ）、賣（メ）、用（ヨ）、路（ロ）

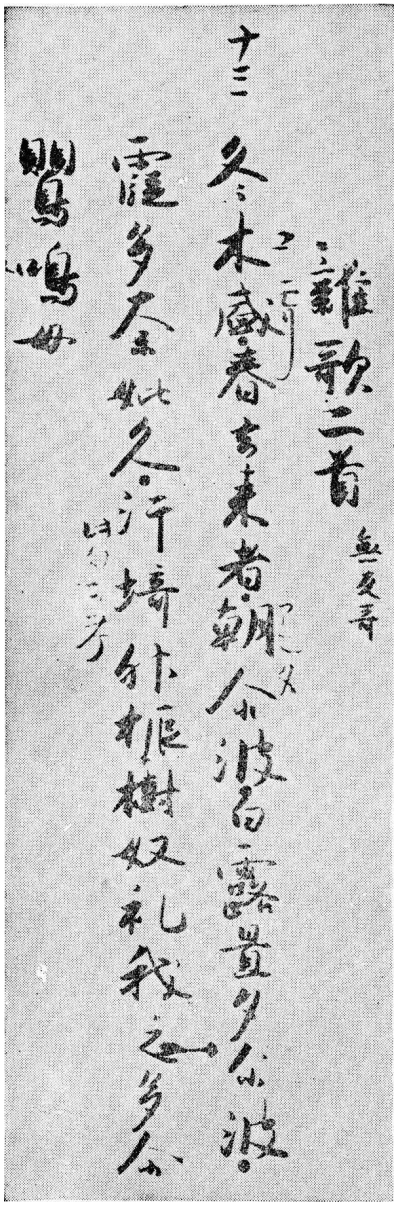
（乙類）　紀、氣、許、曾、止、乃、非、閇、未、米、余、呂



雜歌

冬木成春去来石刺公波白露置多公波霞多奈
妣久汗瑞能枝樹奴礼我之多多公鶯鳴母

右一首



十三

雜歌二首　無反歌

冬木成春去来者朝戸公波白露置多公波
霞多奈妣久汗瑞能枝樹奴礼我之多多公
鶯鳴母

類聚古集

天治本萬葉集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com